

【アプローチ編 いざ青森へ】

7月15日（金）9時、我々は一路青森を目指し高速に乗った。戦い前の戦士たちは、はやる気持ちをおさえ、静かに目的地を目指した。12時を回るころ、小林艇長が口を開いた。「お昼はどうしましょう」間髪をいれず、戦士の一人が続けた。「弁当を買って泊地で取りましょう。一刻も早く状況を確認しましょう。」皆は当然のことながら同意した。一足先に青森入りしていた我妻氏と合流、戦士たちの緊張は少しほぐれる。船底を磨き上げた氏の表情には満足感がただよう。艇上での昼食、周りにはロシア人たちが整備に汗を流している。大きな体を見ると、一度ほぐれた緊張感がよみがえる。『こいつらと戦うんだ・・・』（言葉が悪くて失礼）

食事の後、戦いの相手たちの艇を確認。久々の再会相手と会話を交わす。他のフリートとの交流もレース以上に重要だ。ゆっくりする暇もなく、艇内の整理にかかる。今回、トップをねらう我々はサポートカーを用意し万全の準備にあたる。極限までの軽量化はレーサーとしては当然の仕事だ。一段落すると、もう夕刻になった。青森在住のクルー、S氏の手配した秘密会議場所へ向かう（庶民の言葉を借りれば、宴会場）。途中、通行人に場所を聞くと「おいしいところですよ。」との明るい声。S氏に感謝。まずは、戦いを前に乾杯。元嵯峨クルーのE氏が仕事帰りに激励に駆けつける。否が応でも気分は盛り上がる。遅れて仕事帰りのS氏が到着。戦士はそろった。あとは戦うのみか。青森のうまいものをたらふく平らげた戦士たちは、心の緊張をほどくべく、2次会へ。戦士たちは、明日への不安からかレースの話題はでない。ばか話で場を持たせている。いや、馬鹿話（しもねた）のほうがもともと得意なのだろうか。読者の想像に任せよう。

一人の戦士が、戦いを前に盛り上がる戦士たちに声をかける。「今日はこれくらいにしよう。」この声がなければ、戦士たちは「朝まで緊張をほぐしていた（？）のかもしれない」（翌日遅刻でもしたら、世間から「ばか者」のレッテルをいただく羽目になったであろうことは容易に推察できる）。あたたかく、そして冷静な戦士の言葉だった。

戦士たちは、ホテルへあるいは艇へ足を運んだ。艇を見守るべく眠りに付く戦士の耳に、コトコトという音が飛び込んだ。激励の（？）来客であった。バキューム（ふしぎな）の雰囲気をもった来客は、少ない会話を交わした後、意味もなく静かに去っていった。艇の守人は静かな眠りについた。

翌朝、我妻氏の物音に目を覚ます。今回のレースコーディネーターである彼は、やはりレースに集中している。すでに現地在住のE氏の奥方が差し入れに訪れる。ありがたい。この場を借りて感謝。艇長をはじめ、一人の遅刻者もなく艇に集合する（当然といえば当然であるが・・・）。



最後の艇内整理の後、「はやめにスタートラインに向かいましょう」の声に全員の意識が 戦闘（レース）体制（モード）に入る。ラインに1番で向かう。本部艇らしき大型クルーザーがいる。おや、すでにアンカリングしている。公称500mのラインがやけに短くみえる。スタートと同時にZが揚がることは帆走指示書から理解していたので、我妻氏がいった。「むりせずラインの中よりの隙間をねらいましょう。スタートは少々遅れてもかまいません。」続けてこういった。

「西を押さえましょう。西からのブローを確信して。」前年度、潮でやられた友人の艇の話、西から東への海峡の潮が3ノットはあるであろうことと気圧配置&天気予報等を総合しての判断だった。



### 【戦闘編1・神はわれわれに微笑んだ】



風速は2メートル程度、東からのいかにも弱々しいパフが入るコンディション、4分前とともに予定通りZが揚がる。ペナルティを食らえば、我々の夢はスタートと同時に消え去る。ラインの長さも考慮に入れ、慎重にも慎重を重ねラインにアプローチする。ラインの真ん中付近にじわじわ迫る。下側があいている。セオリーどおりのスタート位置だ。超微風の中、できうる限りの加速だ。我妻氏の激と指示が交錯する。5・4・3・2・スタート！よし、いいスタートだ。トリマーを残して下ヒール。

戦士たちはじっとこらえる。ヘルムスの小林艇長はわずかな振れにも全神経を集中し、ラットをコントロール。周りの艇も苦戦している。時たま東から弱いブローが入る。これを逃せば、あっというまに他艇の後塵を拝すことになる。神経を研ぎ澄まそう。戦士は息を殺そう。我がエスポールはじわじわと前に出る。スタート30分、上位3分の1にいるのは間違いない。予定通り、西よりのコースをひた走る。海面には弱いパフのあとがシマウマの模様のように広がる。下ヒールしている戦士が、パフの情報を伝える。いいぞこの調子。平館海峡が少しずつ近づく。西に行く我々に、古いロシア艇がせまる。セールは新しいが艇はやけに古いのに、上り角度はすばらしい。『畜生、あんな艇に負けてたまるか』。さらにスピードも遅く

ないのには閉口した。



我々はロシア艇をきらって右に出た。我々の上でなにやら騒ぎながら、タックを返す。突然、バウのT氏が「危ない！！ ベア ベア！」のコール。小林艇長がとっさに反応し転舵。養殖のロープだ。ぎりぎりのところで回避。「よかった」戦士たちは心で叫んだ。ロシア艇はこのことを伝えようとしていたのか。畜生！などと思ったことを反省した。なにせ小生が知っているロシア語は、30年前のラジオロシア語講座で覚えた「マイヤールーチカ」（私の外套）のみ（もちろん3日坊主）であったの

だから致し方ない。

我々もタックを返すと、風はさらに落ち、南にまわった。「スピナップ！」の声とともに、ビックスピンを揚げる。レーティング（GPH）を15秒程上げてしまったスピンだ。やっと使えた。トリムに集中すること30分、じわじわと高さを稼ぐ。すごい集中力だ。ついに我々がトップだ。西の艇も東の艇も下に追いやった。完全優勝も夢ではない。戦士たちは皆にそう思った。



西からのブローを予測し、「ジブアップ！」の声とともに強烈なブローが入る。「スピン回収！」戦士たちは急いで回収に当たる。まるで戦場だ。S氏が回収時、手に痛手を受ける。戦いに怪我はつき物と諦めるしかない。全員、多少なりとも傷つく。いつものことだ。戦士たちはみなそう思った。風道をタックしながらひた帆走る。下から、サムライ（JAN350D）が迫ってくる。西を取らせないために、下受けして押さえる。予定通りだ。サムライは東へ逃げていった。

西の岸よりを見ると、一面鏡状態、ロシア艇が止まっている。無風地帯を避け、海面が鈍い黒に見える方へタックを返す。風道を外してはならない。レースは、風の神をひろうゲームと化していた。黒さが増している海面へ近づくと、「ボチャッ、ボチャッ」という変な音にかわる。トップを走る我が艇は、急に艇速を落とす。「やばい、潮だ」異口同音に皆が叫んだ。艇は完全に速力を失った。なんということか。



南から微かに風を感じる。我妻氏が「スピン準備！」と気合の入った声をかける。「スピンは無理です。0.7ノットでバックしています。」小林艇長が悲しい声で叫んだ。残念。バックしている風か。ジブをトリムしても、バックは続く。どれくらい格闘しただろうか。周りを見ると、止まっていた西のロシア艇がパフをつかんで、ぐんぐん上っている。東の艇団も、東からのブローをつかんで高さを稼いでいる。トップにたって歓喜した艇上が、一気に静まる。もうだめだ。今回の戦いはここで終わりか。

## 【戦闘編2・神はわれわれを見離した】

『しかたがない。』戦士たちは心の中で叫んだ。さっきのように順調に最後までレースが

続くと思った我々が間違いだ。ここはじっと風を待とう。戦士たちは、気持ちを切り替えようと努力している。しかし、そう簡単にできることではない。戦士たちの表情からは、小気味良い緊張感は消えていった。漂う時間の長さが、気持ちの入れ替えを応援してくれた。不思議なものだ。諦めの境地とはこんな状況のときの心の有り様を示すのか。戦士たちは状況の悪化と時間の経過の不思議な取り合わせを、青森の海でしばし『味わった』

どれくらいたっただろうか。小生は顔の産毛が、かすかに揺れるのを感じた。「ちょっと吹いてきたかな？」戦士たちは、気持ちの切り替えも早く、セールを風に合わせた。この程度の風では、何の役にも立たないことを知りつつ、トリムに集中した。ロシア艇は、はるか西の霞の中に消えつつあった。これだけ離れば諦めは付いた。東を見れば、こちらもはるか前方にかすかに見えた。セールの様子から、結構帆走っているように見えた。『くやしい!!』……

### 【戦闘編3・神は再びわれわれに微笑むのか】

「西から、ブローがきます」戦士の一人がいった。けっこう力強い。「もっと西に」我妻氏がつぶやいた。風はこちらの希望するようには西には振れなかったが、さきほどの無風がウソのように吹き始め、我がエスポールも艇速を延ばした。西のロシア艇が止まっています。戦士の一人が叫んだ。「やった、西にいなくてよかった」皆は、コース取りがあながち誤りでないことにほっとした。さあ、この風をつかもう！

戦士たちは再び戦闘モードに突入した。神経を研ぎ澄まし、セーリングに集中した。もう津軽海峡に入っている。西のロシア艇は完全に速力を失っている。東に大きなセイルの船がみえる。姫神（ベネトウ40.7IMS GPH555秒）だろうか。我々とほぼ同じスピードだ。いや、我々のほうが若干速い。「いいぞ」みな心の中で叫んだ。GPSで潮を確認すると、1ノット程度。予想よりはるかに弱い。西に出すぎたか。まあいい、順調に帆走しているのだからこのまま突っ走ろう。東の艇の前に出ればいいのだから。ふと後方を見ると、スナッティ

（YAMAHA33S GPH604秒）が迫ってきた。あちらもマストトップスピンのせいとか我々よりも高いハンディをいただいている（エスポはGPH607秒）。いやな迫り方だ。われわれは東に転舵し、敵の後方から切りあがって前に出た。どんどん差が広がる。作戦成功！レーティングは我々が低いのだから、彼の前にいれば負けることはない。

後ろを意識して走ろう。ジブをビームマックスのところからトリムし、スピードを殺さないように走らせる。あたりは一挙に暗くなった。GPSでゴールの位置を確認する。「スピンアップ用意」我妻氏がバウマンT氏に命じる。「下からのスピンだぞ」「OK!」明快な言葉のキャッチボールは二者のセーリング経験の長さや深さを我々に示していた。『美しい!』暗闇の中、スピンが上がる。「絶対に照らすな」「33Sに知られたらまずいぞ」



後方のY33Sは、航海灯の様子から、ジブで走っている。ガスと暗闇の中から、函館の明かりとともに函館山が姿をあらわした。時折、スピンがつぶれる。

「ローリングがひどいです」艇長が言った。「我慢して走ろう。あとわずかだ。」全員がトリムに集中した。「1時にヨットらしき影が見えませんか」我妻氏がいった。目のいい小生が目を凝らすと、陸上の明かりらしい。「ヨットではありません」皆、安堵した。さあフィニッシュまであとわずか。フィニッシュラインを確認する。帆走指示書のゴールの右の灯台は

RED 6 SECとある。見えるのは、REDのフラッシュだ。前にはレース艇は確認できない。ちょっとおかしいがあそこしかない。目標に近づく。風が急に落ちる。「トリムに集中」、「10時にマークブイ」戦士の一人が叫んだ。まもなくフィニッシュラインだ。「プーッ」小気味良いフォーンの音が鳴る。やった、艇上に歓声が響く。12時間の戦いの終焉だ。

セールを下ろし、運営スタッフのいる灯台に近づく。「着順を教えてください」との問いかけに、「話すことはできません」の返答。まあいい。バースにいこう。機走でバースに向かう途中、3,4艇がフィニッシュするのが見えた。後続艇もいい風をつかんでいたんだな。ちょっと心配になる。バースに着くと、そこには姫神EXPRESS(ベネトウ40.7)、ドナ・セシリア(ファースト45F5)、スナッティ(ヤマハ33S)が停泊していた。「おかしい、我々は完全に33Sの前のはずだ」戦士の一人が返答した。「彼らは、ショートカットの航路で来たんだ」と函館の港に詳しい戦士が言った。安心した。ドナに抱かせてもらおうと、ドナより少し先に姫神が入ったらしいという情報を得た。ドナの艇長に「とりあえずは、総合優勝おめでとう」と祝福され、戦士たちははにかんだ。我々も総合優勝の確信を強くした。

片づけを終え、疲れを取るため、函館の町に繰り出した。北海道はいまでも不況らしく、あいている店はほとんどなかった。ようやく居酒屋を見つけ、駆け込んだ。他の艇もここに集まっているようだ。「我々の前には艇は確認できなかったのだから、ファーストホームも取ったかもしれない」小生の言葉に、戦士たちはさらに完全優勝を確信した。このとおりであれば素晴らしいことだ。北海道まで来たかいがあるとういものだ。あっという間に数時間が経過した。のどを潤し、おなかを満たした戦士たちは宿へあるいは艇へともどった。



#### 【結果やいかに 神はどう裁いたか】



翌日、陸上班のT嬢がサポーターで到着した。まずは片づけだ。戦いの後の艇内外を回航モードに変

える。夏の日差しが照りつける。昼食前に姫神から着時間を聞くと、われわれより早かった。残念、ファーストホームや一夜の夢だった。表彰式会場には、車で行くこととする。「せっかくだから函館山に登りましょう」。皆、同意した。時折深い霧が立ち込めていたが、我々が山頂に着いたら目前に360°のパノラマが広がった。戦士たちは激しかった戦いを忘れ、目の景色に見入った。いや、若干2名はおみやげに見入っていた。

湯の川のホテルの表彰式会場に着くと、戦士たちはすぐに入浴した。温泉の気分を堪能した後、いよいよ表彰だ。エレベーターで運営スタッフに「どちらからですか」と聞かれた小生が、「仙台です」と答えると、「よかったですね。今日は表彰台に上れますよ」と返された。ここで総合優勝を確信した。

お決まりの挨拶の後、レース結果の発表だ。「ファーストホームは姫神EXPRESS！」佐藤艇

長はものすごく喜びながらコメントを口にした。ファーストホームははじめてということだったのでその喜び様は会場内のすみずみまで伝わった。いよいよ総合順位の発表だ。「第5位、姫神」「第4位、ドナ・セシリア」「第3位、スナッティ！」おや、レーティング・着順からしてちょっとへんだ。スナッティは2位ではないのか。3位だとすると、やはり小さな船が我々のフィニッシュ後の第2集団に混じっていたのか。昨夜、フィニッシュ後、我々の泊地に入ってきた地元の船が気になった小生は、少々不安になった。



「第2位、エスポアール！」「えっ!!」戦士たちは我が耳を疑った。頭が真っ白になった戦士たちは、どれくらいの時間『かたまって』いただけるか。司会から「壇上へあがってください」と指示された。我々は不思議な顔をして登壇した。小林艇長が賞状と賞品を受け取ると記念撮影だ。カメラマンがいった「エスポアールの皆さん、笑ってください」そう、我々は笑いのない硬い顔で表彰を受けていたのであった。我々の無念さを理解されたい。「優勝、マリオネット！」マリオネットのメンバーがうれしそうに登壇する。結果

表を見ると、なんと我々より47分遅れでフィニッシュしていた。GPHの差が664 - 607 = 57であり、行程はおよそ60 mileであるから我々は彼らの60分前にはフィニッシュできなければ総合優勝はできない計算になる。47分後ろの艇を押さえて走ることはできない。大型艇の宿命だ。もう1艇のY31S (JAZZ) がDNFとなっているのを考えれば、敵ながらすばらしい走りをみせたマリオネットに、我々は惜しみない拍手を贈った。「おめでとう」

#### 【番外編、函館を後にいざホームポートへ】

冷静に考えれば、我々よりレーティングの高い艇が三分の一もいるのであり、着順2位、総合2位は立派な成績ではないか。宮城からの遠征でも過去最高位である。しかし、読者諸君も感じたように、「されど無念の2位」であった。皆、この『もやもや』を抱えて最後の夜を迎えることとなった。「とりあえず、おいしいもので打ち上げをしましょう」小林艇長のやさしい言葉に皆感激した。生きいかの刺身や生ものをおなか一杯いただき、戦士から普通の人間？に変わっていった。「さあ、今日は花火大会のようですから、艇上で楽しみましょう」なんとあたたかい艇長の言葉だろうか。感謝！ 外にでると付近は人で溢れかえっていた。こんなに大勢の人間が函館にいたのだろうかと思うくらいの人手だった。それも7割ほどは十代の少女たちだった。景気の落ち込みが続く北海道では、男は働きに出ているのだろうか勝手に予想する。艇にもどると岸壁は、人で埋っていた。われわれは、彼らの前の特等席である。大金持ちになった気分だ。一番前の席で夏の北海道の花火を楽しんだ。

「ラーメンでも食いにいきましょうか」我々は夜食がわりに駅前に向かった。ラーメン屋も1件しか開いてなかった。祭りがなければ夜はさびしい街のようだ。胃袋を満たしたあと、ホテル組と小生を含めた船中泊組とに別れて戻った。艇には回航を手伝うE氏が到着していた。明日に備えて眠りに着こうとしていると、なにやらコツコツという音が聞こえる。ヒールのある靴かな。いや私の気のせいかな。あまり詮索せず眠ろう。明日もあるのだから……。

翌日、朝5時に強烈な風が吹いている。ちょっとやばいが、天気図を確認して出航を決断した。出港直後の強烈な風も、下北半島を回るときには収まった。2時間ワッチ4時間休息のペースで一路小浜を目指す。深夜、強烈な夜光虫の群れ。きれいというより不気味である。追い潮もあり速力は7~8ノット順調だ。



あさ、目が覚めると江ノ島が見える。海面は鏡のような静けさである。こんなきれいな江ノ島を見るのははじめてだ。金華山水道もまるで外国のようだ。しばしみとれながら航行。田代をクリアーすると、20ノットオーバーの風、寒冷前線の通過のようだ。力強く乗り切り、小浜へ。やっと着いた。36時間の回航であった。

「戦いは終わった」皆より遅れて到着した小生は、いまそう思った。戦い終えたエスポアールは自分のバースで安心したかのように舳われた。



歩きなれたポンツーンに降り立つと、急に今回のレースのことが頭をよぎった。『なんと、いいレースだったのだろう。無念の2位ではあったが、レース行程60mileのうち平館海峡の半分までが、インショアレース。左右にばらけた艇が、ブイ周りレースのようにくびれた平館海峡に集中する。その後は、津軽海峡横断のオフショアレース。潮と風を読みきらなければ勝利はありえない。60mileもあるレースなのに1秒たりとも気が抜けない。この興味深い（おもしろい）コースを、7人の戦士たちが最高の力を出して帆走（はし）りきったのだ。』何か

不思議な充実感が沸いてきた。こんなすばらしいレースに参加させていただいたうえに、クルーの経費負担も大幅に軽くしていただいた小林艇長には感謝してもし尽くせない。

そう思うと同時に、四日間の長くてもあり短くもあったドラマは、静かにその幕を閉じた。